

私小説 千年年史

1000

日記文学から近代文学まで

勝又浩

勝又浩

日記文学から

私小説 千年年史

1000

近代文学まで

私小説の生い立ちを  
浮かび上がらせる  
勉誠出版

日本語がつくり上げた  
日本の文学——  
日記文学、  
和歌や俳句、  
随筆を経て、  
私小説という  
表現手法が生まれた道筋、  
その生い立ちを  
浮かび上がらせる。  
勉誠出版・定価 [本体 2400円+税]

日本語にとって  
「私小説」とは何か

言語は、  
人間の思考や感性を形成する。  
言語の問題は、  
まず人間の自我の問題であり、  
社会の問題、  
その結果としての文学の問題である。

長年私小説の研究を行ってきた  
第一人者による、

私小説研究の総決算。  
日本文学の底流には

「日記」があるという視点から、  
近代の私小説に至るまでの  
日本文学史を書き換える！

勝又浩(かつまた・ひろし)

一九三八年横浜市生まれ。文芸評論家。法政大学文学部名誉教授。  
『文学界』『季刊文科』『三田文学』などで同人雑誌評を担当してきた。  
「我を求めて——中島敦による私小説論の試み」で  
第17回群像新人文賞評論部門。  
『中島敦の遍歴』で第13回やまなし文学賞研究・評論部門を受賞。  
著書に、『引用する精神』(筑摩書房、二〇〇三)、  
『鐘の鳴る丘』世代とアメリカ』(白水社、二〇二二)など多数。



9784585290827



1921095024001

ISBN978-4-585-29082-7

C1095 ¥2400E

定価[本体2400円+税]

勉 誠 出 版

明治開国以来、日本の文化は何事につけても、伝統的な価値観と新来の西洋近代の価値観とのダブルスタンダード、二重基準を持つことになった。人々は洋服で働き、和服で寛ぐような生活を余儀なくされてきたが、それを案外素直に、また器用に受け入れてきたのも事実だ。それはそれとしていかにも日本人らしいこと、日本語が日々涵養している日本的自我に相応しいことなのだ……たとえばずつと昔、漢文を取り込んで美しい、格調高い漢文脈、新しい和漢混交文も作り上げてきたのも日本人なのだ。そういう才能は当然、西洋文学に対しても発揮されて、和洋混交の新しい、繊細な文学も作り上げて、それがつまり私小説なのだ。ところが「和」なのかと言えば、ここが大事なところなのだ。文学観において「和」なのだ。だから私小説は、永い歴史のある民族文学、短歌俳句、日記随筆とも齟齬しない、共生できる、新しい民族文学なのだ。

(本書より)

私小説

1000

日記文学から近代文学まで

千年史

勝又浩

私小説の生い立ちを  
浮かび上がらせる

勉誠出版